

## おじいさんと孫まご

昔むかし、あるところに、とても年とったおじいさんがいました。おじいさんは、ひざがふるえてうまく歩くことができませんでした。耳も聞こえないし、目もよく見えません。そのうえ、歯はもありませんでした。食卓しょく탁の前にすわつても、スプーンをちゃんとぎることができないので、スープをテーブルクロスにこぼしたり、食べ物を口からこぼしたりしました。

おじいさんの息子と、息子のおかみさんは、それをとてもいやがりました。そして、とうとう、おじいさんを部屋のすみの暖炉だんろのかげにすわらせることにしました。そして、素焼きすやのお皿に食べ物を入れて、おじいさんにあたえました。それも、ほんのちょっとびりでした。おじいさんは、いつも、悲しそうな目で食卓のほうをながめしていました。あるとき、おじいさんは、手がふるえて、お皿をしつかり持つていられなくなりました。お皿は床ゆかに落ちてわれてしまいました。息子のおかみさんは、おじいさんをしかりとばしました。おじいさんは、ひとこともいわず、ため息をつくばかりでした。

息子夫婦は、おじいさんに、そまつな木のお皿を買ってきて、それで食べさせました。あるとき、息子夫婦が食卓についていると、四歳さいになる小さな孫まごが、床で、小さな木切れを集めていました。父親が、

「おまえ、そこでなにをしてるんだ」ときくと、孫はいました。

「おわんをこしらえるの。ぼく、大きくなつたら、これでお父さんとお母さんにごはんをあげるの」といました。息子夫婦はしばらく顔を見合わせていましたが、たまらなくなつてわつと泣なきました。そして、すぐに、おじいさんを食卓につれきました。それからというもの、いつもおじいさんもいつしょに食卓をかこむようになりました。そして、おじいさんが少しくらいこぼしても、何ももんくをいいませんでした。